HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	明治期の食育運動 ： 『食養新聞』と帝国食育会
著者	佐藤，信
引用	季刊北海学園大学経済論集，57(3)：87-96
発行日	2009-12-24

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《研究ノート》

明治期の食育運動

――『食養新聞』と帝国食育会――

佐　藤　　信

1．100 年前に存在した食育運動

小泉政権時代の 2005 年 6 月に食育基本法が成立し，翌年 6 月に内閣府は「食育推進国民運動の重点項目」を公表した。そこでは，およそ食に関係する全ての諸組織・関係者が参加し，食育推進に取り組むことが明らかとなっている。もともと同基本法前文が「今こそ，家庭，学校，保育所，地域等を中心に，国民運動として，食育の推進に取り組んでいくことが，我々に課せられている課題である」と述べるように，国家が「食育推進国民運動」を主導しているのがこの基本法の大きな特徴である。しかし，この「食育」は，1990 年代はほとんど知られていなかった用語であることからも，小泉時代に突如姿を現わし，関係者を次々と巻き込んだ「国民運動」であるといえる。

ところで，食育を広く国民に啓蒙し，運動として束ねてゆく状況は，今が初めてのことと見られている。確かに，用語「食育」は 100 年以上前に石塚左玄によって初めて使われた造語であったが，その後，「広く使われることはなかったようです」と内閣府が述べるように[1]，長く人口に膾炙することはなかった。

しかし，100 年前，参加者や行動範囲は狭かったものの，現在と同じような運動を起こそうとした団体があった。その名を帝国食育会という。

帝国食育会は，1905（明治 38）年に，『食養新聞』の主宰者菟道（うじ）春千代を中心に結成された。そして，石塚左玄の化学的食養法を普及すること，「穀食主義を鼓吹して人類生養の本義を簡明す」ることを目的として帝国食育会は集会，機関誌拡大等の活動を行っていた。しかし，『食養新聞』の発行期間は 2 年 7 か月に過ぎず，1907（明治 40）年には会の活動も停止した。会員数も 300 人程度の広がりに終わったことから，後の人々からは全く忘れ去られた存在となったのである。

筆者は，食育基本法成立をめぐる議論を整理する一方で[2]，石塚左玄による 100 年前の「食養」活動に関する資料収集を続けてきた。その中で，帝国食育会の名称を知ることができたが，この会の活動内容については一切が不明であった。しかしようやく機関誌『食養新聞』の存在が明らかとなって，その全容が明らかになりつつある[3]。

本稿の課題は，この帝国食育会がなぜ作られたか，その主張する内容は何か，わずか 3 年でなぜ活動が終焉し，今まで忘れ去られたのかを明らかにすることである。食育推進が喧しい中で，1 世紀前の教訓を引き出したい。

2．石塚左玄と食養新聞

(1)『食養新聞』創刊号と食育

『食養新聞』（食養新聞社）は，1905（明治 38）年 1 月 5 日に創刊している。日刊紙では

なく毎月 5，15，25 日の月 3 回発行であった（第 2 号からは月 2 回発行となっている）。創刊号（全 14 頁）の表紙では「食養問答」として，食育に関する記述がある（読み易いように一部表現を改めた）。

〈**問テ曰**。そのもとは教育は一つの食育にありと唱えられ候こと，甚だもって不審に堪えず候，世界いづれの国を問わず教育の普及を図りて国民の知識を開発いたしおり候，されば我が国のごときも泰西の制度にならい学校を起こし大いに教育の道を開き候。…しかるに教育よりも食育の方を重しとせらせ候はいかなるゆえ由に候や承りたく候〉

〈**答テ曰**。ご不審はごもっともに候，それがしとても教育の大切なる事は承知いたしおり候，それゆえに食育の大切なる事を唱え申し候，それ教育とは智育，徳育，体育の三つを合わせてこれをおのおのの均等に発達いたせ申すべきが教育の本旨に候はずや，されば智を増し，徳を養い，体を育てて心身共に健全なる国民を造るべき大本は食物より他に何物も無きは明らかなる事に候。〉

このように，すでに創刊号において，食育基本法をめぐるキーワードであった，知育・徳育・体育と食育との関連が述べられていた。この理由は明解である。『食養新聞』は編集発行人である菟道春千代が中心となって執筆，運営していたが，石塚も毎号にわたって，自分の原稿を寄せていたのである。創刊号の内容を見出しで確認しよう（強調部分が 2 人の執筆したところである）。

1 面　　：「食養に関する問答」
2 ～ 3 面：**菟道木化園（春千代）**
　　「新年の食物」
3 ～ 4 面：**石塚左玄**
　　「礼儀廉恥の食養論（一）」
4 ～ 5 面：「似て非なる食物」
5 ～ 7 面：「黒木大将に送れるドクトルの忠告書」
7 面　　：「兎の御吸物」
8 ～ 9 面：「食事解（一）」，**石塚左玄**
　　「糯と餅との効力（一）」
10 面　　：「育児の栞」
10～12 面：「不景気を挽回せよ（一）」
12 面　　：「名代食物一口評」
13～14 面：広告

連載第一回の中心筆者は石塚左玄と菟道春千代であり，この二人が『食養新聞』の主筆とも呼べる存在だった。ただ，石塚「礼儀廉恥の食養論」は『食養新聞』に掲載するために書いたのではなく，既刊本を再掲したものである。前年 1904（明治 37）年の『礼儀廉恥の食養論』がそれである[4)]。さらに，石塚左玄は単に執筆者の一人であっただけでなく，新聞購読拡大にも力を入れていた。『食養新聞』は新規の購読者名簿（この購読者を「通常社友」と呼んでいる ── 後述 ──）を各号に掲載しており，住所，氏名，紹介者を確認する事ができる。第 21 号には，紹介者として石塚左玄本人が登場し，紹介を受けた通常社友の住所に福井市がある。福井は石塚の出身地であることから何らかの地縁者であったと推測できる。石塚左玄は『食養新聞』運営の主力メンバーでもあった。

⑵『食養新聞』創刊の時代背景

創刊号見出しに「黒木将軍」の表記があるが，これは日露戦争時の陸軍大将黒木為禎（1844－1923）のことである。記事は，満州に出征する際の糧食として，日本人の体質にあっているのは餅に勝るものはないこと，そして副食物として「納豆」「小魚」「佃煮」「鉄火味噌」「副神漬」などが良いと述べている。創刊号の発行時期は，前年 12 月 4 日に旅順攻囲戦における有名な 203 高地の占領を果たし，翌 1905 年 1 月の国溝台会戦を開始

私立成田図書館所蔵

明治三十八年一月五日　食養新聞　第壹號　（一）

（明治卅七年十二月廿一日　第三種郵便物認可）　毎月二四、五日、十五日、廿五日）發行

發行所　東京日本橋區室町二丁目五番地（電話本局二一六一三番）　食養新聞社

食養新聞　第壹號

問テ曰。 其許は教育は一の食育にありと唱へられ候こと、甚だ以て不審に堪ず候、世界いづれの國を問はず教育の普及を圖りて國民の智識を開發いたし居候、されば我國の如きも泰西の制度に倣ひ學校を起し大に教育の道を開き候も亦日に月に文明に進み候、然るに教育よりも食育の方を重しとせられ候は如何なる故由に候や承り度候。

食養（一）問答

答テ曰。 御不審は御尤に候、某とても教育の大切なる事は承知致居候、それゆゑに食育の大切なる事を唱へ申候、それ教育とは智育、德育、體育の三を合せて之を各々均等に發育致させ申すべきが教育の本旨に候はずや、されば智を增し德を養ひ體を育てゝ身心共に健全なる國民を造るべき大本は食物より外に何物も無きは明なる事に候。

食養（二）問答

問テ曰。 其許の御答は未だ要領を得ざるやうに存候、三育の內にて體育の一は食育に關係あるべくと存候へども、智育、德育までも食物に關係ありとの御說は甚だ無稽の御說に候はずや、たとへ躰育たりと雖も食物にのみ依賴して强健ならしめんこと甚だ覺束なき事に候、必ず体操または運動の方法が躰育上最も重要の問題に候はずや。

食養（三）問答

答テ曰。 智德體の三育を混同して御說し致候ては甚だまぎらはしく存候もそのの內にて先づ其一つを選び、体育の事より御話いたすべく候、今仰せられし躰操または運動なども强に惡き事とは申さず候へども、世人が信じ居候ほどに必要のものには候はず、されば敢て体操または運動の方法を用ひずとも食育に注意致さば事足り可申候。

▲特別廣告

菓子舗　港月堂
でんわ三百十七番

横濱太田町四丁目角

菓子舗　港月堂
横濱太田町四丁目角
電話三百十七番

新年山菓子
勅題新菓
案考人大匠花木道

發賣元　港月堂

資料：『食養新聞（創刊号）』1905（明治 38）年 1 月 5 日号。（成田山仏教図書館所蔵）

する直前であった。

戦時中を窺わせる広告も散見する。一面広告には，菟道春千代考案の「軍国の新菓　神風お古し」が載っているし，13 面には戦勝記念品としての「銃弾型煙管」「銃弾型パイプ」の広告も載っている。

また，14 面の一面広告として，「陸海軍人勅諭絵葉書」（一組六枚入り 20 銭）が食養新聞社から発行しているとの案内も掲載している。

つまり，『食養新聞』とそれを発刊する食養新聞社は，日露戦争旅順攻囲戦の勝利に酔いしれた時期に創刊した，「食」をめぐる愛国精神発露のための，そしてナショナリズム鼓舞のための発行物だったのである。14 面の広告の一文には「陸外軍人勅諭絵葉書」を「日本国民として忠君愛国の精神あるものは競うて使用せられんことを希望す」などとあることからも，その性格が窺えよう。菟道春千代は，新聞社の創業者であったし，主筆兼コピーライターの才能も発揮していたといえる。

石塚左玄は自らの食養論と食育の理解者を増やそうと努力していたのであり，その手段として『食養新聞』を利用していた。結果として，この時代の精神主義，ナショナリズムの一環を担うことにもなった。その後，こうした主張は『食養新聞』記事においてさらにエスカレートしてゆき，購読者を会員とする帝国食育会の結成に至るのである。

⑶『食養新聞』発行の仕組み

ここで，『食養新聞』の発行スタイルを見ておこう。初年度の定価は一部 5 銭，半年分前金で 90 銭（月 3 回発行の計算），一年分前金だと 1 円 70 銭（同様）であった。定価がこのように明記されたのは創刊第五号（2 月）からで，定期的な刊行が軌道に乗ってきたのがこの頃だったのであろう。発行費用はどこから調達していたのか。第三号をみると，全 7 条からなる「食養新聞社社友規則」が掲載されており，第 2 条には「本社発行の食養新聞を永遠に維持してその目的を達せんがため広く社友を求むものとす」として，社友から運営資金の一部を調達しようとしていたことが分かる。社友にも種類があって，一時金 30 円以上を寄付する人には「創立社友」という位置づけをし，一時金 20 円以上の場合は「特別社友」，一時金 10 円以上の場合は「通常社友」という扱いだった（第 3 条）。そして寄付金の額に応じて得られるサービスにも差がつけられていた。「創立社友」には本紙を無期限配付，「特別社友」には本紙を定価の半額配付，「通常社友」には本紙を定価二割引き配付というようである。これら社友とは，今で言う定期刊行雑誌の購読会員としての位置づけが当てはまる。

また，社友になると，食養新聞社主催の食養講演会へ無料出席ができ（第 5 条），食養に関する論文の提出や質問も可能で（第 6 条），さらに食養新聞社出版の図書を定価の 3 割引きで購入可能となっていた（第 7 条）。

食養新聞社の本社は東京市日本橋区（当時）におかれ，東京と横浜を主な活動拠点としていた。その後，埼玉支局を設置し（第 7 号），また，社務拡張のため東京府および埼玉，千葉県下を巡回する社員を置くように発展している（第 11 号社告）。この社員の業務内容は読者拡大が主であるが，半年購読契約を結んだ社友に対する集金業務も含まれていたようである。

創刊からほぼ半年経過した第 14 号（1905 年 7 月 10 日付）には，新聞代金は購読申し込みの際に必ず前金を払っていただきたいと懇願する社告が載っている。半年契約の会員に対する督促の意味もあったのだろう。購読料に関する社告はこの後，『食養新聞』の紙面に頻繁に登場するようになる。その一方で，新聞購読の社友たちを巻き込んだ新組織の結成にむかう。その新組織が帝国食育会である。

3．帝国食育会の登場

帝国食育会は『食養新聞』第22号（1905年11月10日付）に趣意書を掲載し，その実態を始めて明らかにした。趣意書には，「わが帝国は今やまさに5千万の国民を有して国運また日に月に旺盛の域に赴くがごとしといへども，翻りて国民の身体を見れば有病短命なるもの多くして，無病長寿なるものはなはだ少なきにあらずや，もしそれ『一国は一人をもって起こり，一人をもって亡ぶ』というを真なりとせば，国民に病多きは国家滅亡の前兆なりというもあえて不当の言辞にはあらざるべし」とある。

国民に病気が多い事は，国家が亡ぶ前兆でもあると危惧しているのである。ではそのためにどうしたら良いのか。趣意書は続く。「ただただ穀食より来たる着実の精神を養成してまず1人の身を無病長寿たらしむるを以て本旨とし，もし余力あらば秩序的にこれを他に及ぼすを以て会員たる者の義なり仁なりと為すものなり」。一人ひとりが自分で穀食を実践し，健康（無病長寿）への努力をすべきであるとしている。

趣意書はこの後も続くのであるが，実はここまでは，ちょうど1か月前の『食養新聞』に「帝国先進会趣意書」として，全く同様の文面が掲載されていた。どうやら，この1か月の間に，社会情勢の変化に鑑みて会の名称を「帝国先進会」から「帝国食育会」へすかさず転換したようである。1905年の10月から11月にかけて，『食養新聞』の印刷を考慮した場合，おおよそ9月から10月にかけて何が起こっていたか。

表に見るように，日露講和条約議定書調印の直後に『食養新聞』20号が発刊されている。東京では，日比谷焼き討ち事件をきっかけにした戒厳令が敷かれている時である。この状況下で帝国先進会の創立を図ったのであるが，企図するところはそれほど過激なものではなかった。発起人の一人は次のように語る。

「武力的戦争には大勝利なりしも智略的外交には大失敗たりしを徒に憂ふる事を止めよ，この失敗のかえって天下後世の一大教訓たるを思わば何時までも執着して憂ふるは大国民の心事にあらず。我国運を益々隆盛の域に進めんには（略），日常の生活を簡易ならしむるにあり，国民が忘れんとして忘れ難しとする外交大失敗の善後策は是に優るものなけん。

表　1905（明治38）年の主な出来事

5月27～28日	日本海大海戦
6月2日	米ルーズベルト大統領，日露に講和条約勧告
8月10日～	ポーツマス講和会議開始
9月5日	日露講和条約議定書調印
9月5日	日比谷の講和反対国民大会騒擾化，焼き討ち事件
9月6日～	東京地方に戒厳令（～11月29日）
9月	講和反対の多数新聞に停止命令
9月21日	6博士の反対上奏
10月9日	平民社解散
10月10日付	『食養新聞』第1巻第20号発刊。帝国先進会趣意書
11月10日付	『食養新聞』第1巻第22号発刊。帝国食育会趣意書
11月17日	第二次日韓条約調印
12月6日	普通選挙連合会結成
12月20日	勧告統監府および理事庁官制公布

資料：年表編纂委員会編『日本資本主義年表』青木文庫。

嗚呼簡易生活なる哉，簡易生活の良方法を知得せば，海外貿易にはた海外出稼に必ず優勢を占め，ポウスマスにて演じたる，大恨事を転じて他日富国の根源たらしむる事を得べし(略) 本会の起こる所以は実に茲にあり(略)」

どうやら帝国先進会設立の目的は，ポーツマス条約の失敗を克服するための，日常生活，衣食住を見直すことに運動の主眼があり，論もソフトと言っていい。ところが，帝国食育会では食養に限定した運動を提起するところに大きな違いがある。

帝国食育会の，帝国先進会の趣意書に続く文言は次のようである。

「然れども，智・徳・体の三育，即ち教育は一の食育にありという科学的食養の理法あるが故に，いやしくも国を憂い世を思うものは，この食養法によりて帝国国民の体心二者を改造せざれば，朝野がこぞりて熱心に普及を計れる国民教育も，いわゆる労して功なきに終らん」「体心二者は全く食物の所造にして之を転変改易せしむるものもまた是食物なり，世間もしこの説に疑いを容るるものあらば試みにその食を断ちてなお体と心とを保持せらるるや否やを実験せよ」「よって本会は会員各自の健康を保持し天寿を全うせしむるを主としてひいて経国済民の実を挙げんとす」(『食養新聞』第 22 号)。

帝国食育会にあっては，石塚左玄の「化学的食養法」の実践 —— 食育 —— こそが「小にしては家内安全，息災延命，子孫長久」「大にしては天下泰平，四海安穏，国運隆興」につながるとしているのである。このように，帝国食育会結成の理由は，国民の排外的ナショナリズムが高揚している時期の，石塚食養法の普及にあった。肉食，乳製品食など泰西の食を批判し，当時の日本人の日常食 —— 穀菜食 —— を推奨するのは時代に適合した主張であった事は間違いない。

また，当時ベストセラーとなった村井弦斎『食道楽』に対する批判もあった[5)]。「今や世人は科学によらざる想像的食養を盲信し，または食道楽的食養を賛美して益々国民の身体を虚弱にし，寿命を短縮しはたまた心霊を汚損せり，余等これを目撃して黙するに忍びず，すなわち本会を設立して広く同感の士を求む(略)」(『食養新聞』第 22 号)。

こうして，帝国食育会は以下の綱領，規約とともにその姿を現したのである。

帝国食育会綱領および規約

綱領

1　本会は穀食主義を鼓吹して人類生養の本義を闡明す。
2　本会は人類の享有せる天寿を全うするが為に化学的食養法に由りて却病保生の要道を講究す。
3　本会は会員各自の無病長寿，息災延命，子孫長久を企図しなお之を普及して国家安全の籌計を画す。
4　本会は科学食養法に由りて帝国々民の体心二者を改造し以て世界に対し最も優勝なる国民たらしめん事を期す。
5　本会は空理空想を排して専ら着実なる精神を養成し以て朝野百般の事業を優秀に完成せしめん事を期す。

規約

1　本会の会員たらん事を欲する者は会員の紹介を以て其旨を申込み本会綱領の実践躬行を誓約すべし。
2　本会は毎月一回常集会を開催して石塚左玄君を始め先進者の講演を聴くものとす。
3　本会の主義を拡張する為に『食養新聞』を機関と為し無代価にて之を会員に頒布すべし。
4　本会は之を東京に置き必要に応じて全国枢要の地に支会を設置すべし。
5　本会の会員は石塚左玄君に就て親しく体心二者の食養法を聴く事を得。
6　本会員は常に会員相互の利益を増進する

事を企画し以て一致団結の実を挙ぐるものとす。

7　会員は左の規定に随て之を特別，賛助，通常の三種に区別す。

一，特別会員　一時金二円以上を寄付せらるる篤志者

二，賛助会員　一時金十円以上を寄付せらるる篤志者

三，通常会員　毎月会費として金二十銭を納むるもの

8　会員にして会費の怠納三ヶ月以上に及ぶ者は直に之を除名すべし。

9　会員には本会より会員証及徴章を交付す。但し退会の節はこれを返納すべし。

10　退会者は其事由を本会に届出べし。但退会当月の会費は徴収するものとす。

4．帝国食育会の転換と終焉

⑴『食養新聞』の「発展」と活動のピーク

帝国食育会結成を記した号には，創立趣意書の掲載と共に定価値上げを通告している。すなわち，1部10銭（郵税1部5厘），半年分（12部）1円10銭，1年分（24部）2円への変更である。また，購読契約を行うためには，「代金及び郵税とも必ず前金にあらざれば発送せず」としていること，また「新聞代金不納者（未納者のこと ── 引用者）」の一覧を毎号掲載するようになったことなど，代金回収に力を入れていたのが紙面から伺える。

『食養新聞』読者は徐々に拡大してゆき，それにつれて，単なる新聞としての性格から帝国食育会の機関誌としてのそれへ変容してゆく。第24号社告には「明年一月より帝国食育会の機関新聞とし紙面に改良を加え一大発展を期し候」なる一文が載ることになる（1905年12月10日付）。同時に「就いては自然定価等にも影響を及ぼし且つ本月は決算月に相当し尚新聞代金未納の諸君有（略）」り，葉書にて請求を行うとの連絡を忘れてはいない。

この「紙面の改良」とは何であったか。第25号（1905年12月25日付）によれば，「本紙記事の如きも従来よりは平易にして簡約を旨とし，尚かつ絵画を挿入して婦女童幼の閲読に便ならしむるは勿論，久しく絶本の為に世人が読まんとして読む事を得ざりし，石塚左玄君の著述にかかる『訂正増補　化学的食養長寿論』を連載し（後略）」とある。

「改良」後の『食養新聞』には上記『化学的食養長寿論』の連載の他，菟道木花園（春千代）の「天寿と人業」の連載，会告「帝国食育会常集会」の案内などが紙面を飾る事になる。

ここで，帝国食育会にはどのような人々が入会したのか。代表的な事例を以下に紹介しよう。

『食養新聞』1906（明治39）年5月10日号に「入会者の述壊」がある。それによれば，「私はあるところで石塚先生の食養上に就いてのお話をききました。併しその時には私も家族も皆安全で身に恙（つつが）はなかったので（略）したが，フト倅が肺患に罹りまして（略）始めて私は世間のお医者様やお薬や滋養物に注意する事となりました（略）ところがドーしてもはかばかしくいかないのです（略）如何に玄関先は見事でありましても，値は高くても，世間のお医者様，お薬，滋養物の有効は，到底私は認められないのです，そこで私は人間には食物が第一ということが悟られました，全く食物がなければ人の生命は繋ぐことが出来ませぬ，（略）人を生かすも殺すもただ食物にあるという，乃ち先生のお説が初めて分かったのです（略）九段のN氏とはかねて別懇でありまして，この話をいたしましたら，同氏のいわるるには，幸い帝国食育会なる会があるから，是非入会せよとのお勧めで，乃ち同氏の紹介を得て今日参った次第であります。」

上記のような理由で入会，常集会への参加となった人が多かったものと推測できる。第4回常集会（5月5日開催か）には35名以上の参加者，第5回常集会では約100名の参加者があった（6月5日開催か）ことが『食養新聞』に明記されている。

⑵活動の衰退

『食養新聞』，そして帝国食育会の活動は1906（明治39）年の夏頃をピークとして，早くも衰退に向かう。なぜだろうか。

一つは，会費収入の困難さ，財政難にある。『食養新聞』第21号（1906年11月10日付）には「本会の実況を報ず」として，会員総計が345人いること，ただし，会費不納者がいるため300人程度の会費収入で運営しなければならないこと，そしてそれでは維持困難であることを正直に吐露している。つまり，1か月の総収入を60円とすると，事務員手当15円，発送費用6円，常集会費用6円，封筒代等3円とすると残金30円となる。編集主任に其れ相応の報酬を支出するならば不足を生じると説明している。帝国食育会の活動は，ピーク時であったときでさえ，読者が減少すれば，もしくは会費・新聞購読料が減少すれば，新聞発行が一挙に困難になる状況であったのである。

二つは，石塚左玄の食養の教えそのものに原因がある。

1906年6月25日号に「食養問答」というコーナーが設けられている。ここには，「化学的食養法の人生に欠くべからざる必要なことは，かねて石塚先生のお説なり，又毎号の誌上なりにて，百も承知いたしておりますが，どうも実際に行われない（略）。到底痩世帯のものには，経済上許さないのです。（略）そこで化学的食養法を行はんには，まず金がウントあって，而して閑人でなくば，不可であると思います如何にや」との質問が寄せられる。

これに対して，「毎日3度のお菜につき，経済上許さないとの質問ですが，それは今までの食物を主として，食養上の食物を客とするからで，これをアベコベにさへすればよいのである。食養的料理法は，かの食道楽如き，贅沢三昧な料理法とは異なり，魚肉鶏卵等，凡て動物性のものを排し，穀物とか，野菜とか，海草類とか，みな植物性のものを採るのであるから，不経済なことは無い筈であります（略）」と答えている。

当時の日本人の食事様式からみて，一日数種類の穀菜食を摂る余裕のある家庭は，一部富裕層を除いて少なかったことが窺える。そして，何よりも，帝国食育会の会員が，石塚左玄の食養法を実践し，その結果健康となり，他の人々に普及するような効果を得たかどうか，そこに大きな問題があったのである。さらに，菟道春千代本人の身にも，活動を辞めるに至る出来事が発生する。最終号を見てみよう。

⑶なぜ，『食養新聞』，帝国食育会は終焉したのか

一つは，最終号（第12号，1907年7月25日付）の記事に理由が書かれている。お菟道春千代の8歳になる長女（菟道三千代）が5月25日午前に死去したのである。その時の石塚左玄の診断や投薬に大きな疑問を持ったのが新聞廃刊と活動終焉の大きな理由である。新聞には以下のように記されている。

「（略）その死に至るの原因及び病中の経過は勿論，その前々日に受けたる石塚左玄氏の診断および死を去ること数時間前に岡部剛雄氏の施したる施術等は果して適法なりしか，また石塚氏の投薬および同氏が指示せる食養療法の無効たりしこと，また余の肉眼に映じたる石塚氏と心眼で観たる石塚氏とに就いて大に世人の注意を喚起すべき問題あり，依りて不日別に此等の実情を詳述したる一遍の書を食養新聞臨時増刊として発行し広く世に頒

つべければ巨細の事情は之に就いて知られよ」『食養新聞』（最終号）。

岡部剛雄とは会の主力メンバーの医者である。菟道春千代は彼らの施術に極めて疑いを感じ，臨時増刊号の発行を通じて実情を訴えようとまで考えた。現実に発行されたかどうかは臨時号が存在していないため分からない。明らかなのは，この号を最後として『食養新聞』が終刊した事実である。

帝国食育会の活動が終焉したもう一つの理由として，菟道春千代本人の健康状態が挙げられる。菟道春千代は後に自分の半生について次のように述べている。

「さて余は元来医者の家に生まれた者だが，（略）先天的に胃腸に不健全なところがあると見えて，平素から身体が不健全であった，それにも拘わらず壮年時代には血気の勇に駆られて，随分に暴食をほしいままにした（略），明治 26 年の 12 月には毎日続けて 1 週間も喀血した事がある，こういうありさまであるから，気が附いてみると将来が案じられて堪らない」「然るに（略）腹部按摩の伝習を受けて，日夜に自分で腹部マッサージを行ったこともある，また其の後に長瀬君（陸軍軍医監）の紹介で**石塚左玄君と懇意になって同氏の主唱した化学的食養法もザット十年間も実行した，のみならず後には食養宗の大信者となってこれが鼓吹に尽瘁して食養雑誌を 3 年間も発行した事がある，けれども其の結果は余り面白くなかった**（略）」。（菟道春千代『平凡なる忠告』1911（明治 44）年刊，４～６ページ。強調は引用者）。

ここでいう食養雑誌とは『食養新聞』のことであろう。菟道春千代本人が 3 年間発行したと述べているから，1905～1907 年までが発行期間であったことは間違いない。そして，３年で終焉した理由は，菟道春千代本人の食養実践の効果が現われなかったからと分かる。『平凡なる忠告』の続きを見よう。

菟道春千代は，化学的食養法を十年も続けても効果がなく「依然として胃腸が不健全であったが，昨年の夏頃（明治 43 年）にふとした事情から医学士荒井程吉君と懇意になったので，ある時に同君の診察を受けて種々懇篤なる指導を蒙ったが，その時に荒井君の云はるるには君のような消化機能の不活発な，いわゆる慢性の胃腸病者には，近頃我が国で発明された新進の**ヂゲスチン**という消化剤を適度に用いたら良かろう，そして**食物は何でも彼でも構わずに食う方がよい，世間でいうように，あれが悪いこれが良いと，食物選びをしてみた所が，それで必ずしも健康を保つというものではない，とこう説かれた**」（強調引用者）。

医者による適切な診断と適切な投薬，そして何でも食べた方がよいという，今では極めて普通の考え方を，菟道はこの時悟ったと共に，結果的に身体に最も効果的だったのである。

5．まとめ ── 100 年前の食育運動が教えるもの

以上，『食養新聞』を主として，その発刊から終焉までを確認してきた。現在の食育推進国民運動のさかのぼること 100 年前に，帝国食育会による活動があったことを確認してきた。その時のオピニオンリーダーが，石塚左玄であったことも明らかにした。そして，『食養新聞』が終焉した理由は，参加者（とくに代表である菟道春千代）の，食養は疑わし，効果なしとの思いであったことを指摘しておきたい。

21 世紀の現在にあっては，国民総動員運動と呼ばれる食育推進が行われている。同じ過ちを繰り返さないためにも，100 年前の運動から以下の諸点を教訓としたいものである。

第一に，100 年前の帝国食育会の趣意書に見るように，そこには，石塚左玄「化学的食養法」の普及によって国民一人一人の体と心

を改造し，それをもって国家興隆を図るとの目的があった。しかるに，現今の食育基本法はどうであろう。そこには国民への「健全な食生活」の達成を示しているが，果たしてどのような食生活像を目標をするものか，具体的に示してはいない。すなわち 100 年前の食養運動よりも劣っていると言わざるを得ない。

第二に，当時の時代背景と食育との深い関係を理解しておく必要がある。日露戦争が終了し，ポーツマスにおいて日露講和条約議定書が調印（1905（明治 38）年 9 月）された直後に帝国食育会は設立されている。講和反対の国民世論が頻発していたときの結成であり，まさに排他的ナショナリズム発露としての取り組みであった。だからこそ，穀菜食を奨励し肉食を否定する石塚左玄の食養論に時の文人たちが —— その正否にも拘わらず —— 共感したのである。

第三に，盲信の危険性である。一部の人に効果があったからといって全員に効果があるとは言えない。菟道春千代は，石塚左玄流食養法の盲信から脱却したといっても，今度はヂゲスチンという消化剤を盲信することとなった。菟道個人は「何でも食うという主義になると同時に，新消化剤たるヂゲスチンを適度に服用することになった，スルと僅かに１年経つか経たぬ間に，いかにも頑固であった胃腸病が，あたかも薄紙を剝ぐような工合に，漸次良くなって来て，今日では殆ど健康といっても差し支えないようになった」といった経験をした。といっても，万人に適合するかどうかはまた別の問題である。

『食養新聞』は 1907 年 7 月をもって終刊となり，帝国食育会の活動も終焉した。しかしその直後，帝国食育会会員，そして内務省関係者らによって，同年 11 月に新たに新団体が結成される。食養会である[6]。食養会は，月刊誌『化学的食養雑誌』を創刊，石塚左玄は顧問に就任する。石塚は 1909（明治 42）年 10 月に 59 歳で死去したが，雑誌は 1935（昭和 10）年まで継続し，その後，国民食協会『食養』と名称を変え，戦時経済における調理や栄養補給に関する啓蒙活動を，石塚理論に基づき続けてゆく。第二次大戦後も，国民食協会の活動は新たな組織 —— 国民栄養協会や全国地区衛生組織連合会 —— として継続し，現在も発刊している『食生活』に継続してゆくのである。

〈注〉

1）そのため，内閣府のサイト「食育推進担当ホームページ」の「食育という言葉について」においても，石塚左玄『食物養生法』（1898 年）および村井弦斎『食道楽』（1903）年を引用してこの 2 冊を食育の用語が使われた最初であるとしており，「しかしながら，その後暫くの間「食育」という言葉が世間で広く使われることはなかったようです」と結んでいる（http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/why/why03.html）。

2）食育基本法成立をめぐる議論については，佐藤信「食育基本法の何が問われるのか」河合知子他『問われる食育と栄養士』筑波書房，2006 年。

3）『食養新聞』は現在，以下の図書館に所蔵が確認されている。成田山仏教図書館には，第 1 巻（明治 38 年）1 ～25 号，第 2 巻（明治 39 年）8 ～24 号，第 3 巻（明治 40 年）1 ～10 号。東京大学総合図書館には，第 2 巻 3 ～24 号，第 3 巻 1 ～10，12 号。

4）石塚左玄『礼儀廉恥の食養論』（1904 年）は，国立国会図書館近代デジタルライブラリーにおいてダウンロードできる（http://kindai.ndl.go.jp/index.html）。

5）『食養新聞』において，村井弦斎に対する批判的表現はいくつか見られるが，村井本人は，その後，石塚左玄の食養に賛意を示すようになる。

6）食養会は 1907（明治 40）年，旧内務省のバックアップで設立されたと言われている（国民栄養協会『食のエッセイ珠玉の 80 選』同，1986 年）。しかし，その具体的経緯については一切説明されていない。むしろ，『食養新聞』の活動終焉直後，石塚左玄や岡部剛雄らが同志を集めてあわただしく結成したのが食養会ではなかったかと考えられる。